



Title	中井家資料（旧新田文庫）
Author(s)	
Citation	懷徳. 1983, 52, p. 40-41
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90612
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「中井家資料」（旧新田文庫）

今年十一月、新田和子氏旧蔵の「中井家資料」を懷徳堂・友の会において入手し得た。これは、懷徳堂ならびに中井家に関する遺物のコレクションである。目下、調査中であるが、ここにその大要を紹介する。

はじめに、同資料の由来ならびに入手の経緯について述べる。

同資料は、中井家最後の子孫であった中井終子氏（昭和三〇年五月一七日病没）の養女、新田和子氏（結婚により改姓）が旧蔵されていたものである。ほとんど散佚することなく、今日に至るまで保管されてきたのは、一に同氏の功績である。

中井終子氏没後、新田氏は相続した遺物の内、保管場所の関係上、二分して、かさばる書籍類を中心にしたものを、吹田市内のハリストス正教会に寄託し、残りの分（中井終子氏が特に保管を遺言した印章などを含む）を自宅で保管されてきた。

その後、昭和五四年に、新田氏は前者を大阪大学に寄贈された。これが「新田文庫」と称されているものである。そして今回、はしくもその後者をも入手することになったわけである。かくして源を一にする中井家全遺品が再び一所に会するを得たのであった。

つぎに、遺物の内容を、類別して紹介する。

印記類として、印章が計二四七顆ある。竹山・履軒に始まり、中井家歴代ならびに懷徳堂の印章である。履軒の四二顆の場合など、ほとんどが自刻のものと思われる。印章がまとまっていたのは、中井家で大切に保存してきたためであろう。『懷徳堂印存』（昭和一四年刊）との照合をする予定である。

文房類では、硯五面、硯箱三盒を始め、水滴など計十一件がある。

扁額類では、懷徳堂において掲げられていたところの、竹山の書に成る「白鹿洞学規」・「懷徳堂記」、履軒の書斎に掲げられていた履軒筆の「天楽楼記」・「水哉館」など計五面がある。この「水哉館」の額は、「新田文庫」中の

「華胥国門」の額と対であったと思われる。

装潢類では、五井蘭洲・履軒を始めとして懷徳堂関係者のものが計二〇幅。

短冊類は、中井養仙の辭世など計一七六枚。

遺稿類は「中井天生關係を除くもの」と「中井天生關係」とに大別する。

前者は、形式が種々であるので計算しにくいのであるが計七六点とする。履軒關係の遺稿が多い。

後者は計六三四点を数える。

書簡類は、中井蕉園あての竹山書簡一三通など、中井家關係計二通。中井天生・終子關係計三一〇通。

記録類は、「明治以前」と「明治以後」とに大別される。

前者では、「中井家歴代裏事録」(本号所載「懷徳堂物語」)中に記されている葬儀の記録(四五点を始めとして、中井家親類書その他九点、懷徳堂・中井家公務關係文書一点など、計八九点。

後者では、中井桐園の写真など計二四四点。この中には、懷徳堂先賢例祭における明治二三年から昭和一九年に至るまでの祭文などが含まれる。

書籍類では、見るべきものはない。線装本は幕末から明治にかけての袖珍本が多い。おそらくは、中井天生の旧蔵書であったと考えられる。計一部・五二冊三帖二鋪。

その他、拓本類、道具類、特殊遺品類などがあるが、省略する。

全体的特徴を言えば、(一)中井家の私的側面を伝えるもの、(二)中井天生關係のものに、大別される。

(一)は、中井家から外へ出ないで伝わったためであろう。これほど印章がまとまって伝えられたことは、その間の事情を物語っている。その他、竹山の『草茅危言』序文の自筆草稿や、履軒が講義用参考図として示しつつ使ったと思われる「親族解説図」などは、明治以後、中井家の私的記録類の中に埋もれていたからこそ、かえって無事に伝わったものと思われる。

(二)は、中井天生自身が中井家の遺物を保管していた關係上、しぜんと蓄積されたものである。概観したところでは、中井天生は明治二〇年代、すでに(明治二年廃校となった)懷徳堂復興を志していて、運動を開始していたようである。その努力が実って、大正五年の懷徳堂再建へとつながっていったのではないかと考える。天生の日記が多数残っているの、それによって重建懷徳堂に至る過程がさらに鮮明となるであろう。